# 現代舞台芸術に関する観客層の実態と意識

文化庁文化部文化普及課
企画調査係長　上　杉　道　世

## 1. 現代舞台芸術と第二国立劇場

現代舞台芸術とは耳馴れない言葉かもしれないが、歌舞伎や文楽等が江戸時代以前から生まれ育ってきたわが国の古典的な伝統芸能に対し、オペラ・バレエ・現代舞踊・コンサート・現代演劇等の明治以降に、わが国に移入されてきた舞台で上演される芸術を総称しているものである。

「文化の時代」と言われる今日、特に東京においては、これら現代舞台芸術のさまざまな公演が日夜数えきれないほど催されている。また地方にあっても、文化会館等の優れた劇場としての機能をもった施設が続々と設置されつつある。このようなことから、現代舞台芸術はかつてないほどの隆勢の時代を迎えつつあるかに見えるが、その内実をよく検討してみると数多くの問題を抱えているのが実態である。例えば、各公演団体はいずれも経営的に苦しい中で公演を続けており、優れた芸術性を高めつつより多くの観客を動員するための努力が一層要請されるであろう。また、公演のための完備した施設の不足、芸術家養成の不十分さ、情報・研究活動の不十分さ等さまざまな点で今後改善されていかねばならない。

わが国の今後の在り方という点からも、物の豊かさを確保すると同時に、心の豊かさを広く国民の間に育んでいく必要がある。そして、オペラ・バレエ・コンサート・現代演劇等の現代舞台芸術は、明治以降に初めてわが国に移入されたものではあるが、すでに国民の間に相当定着しており、これらの創造に情熱を傾け、また、これらを鑑賞することに生活の喜びを見出している人々も確実に増えつつある。さらに、今後の国際化社会にあって、世界共通の芸術の精華である現代舞台芸術をわが国においても一層振興していく必要がある。そのためには、その創造普及活動の中心となる優れた劇場施設が必要であるが、残念なことにわが国にこれまで設けられた劇場施設で現代舞台芸術の創造のための機能が完備している施設は皆無に等しいと言わざるを得ない。

このため、文化庁では、このような現状を克服し、わが国の芸術文化の一層の振興を図るため、現代舞台芸術の創造普及の中枢としての第二国立劇場（仮称）の設立準備をかねてから進めているところである。

その基本的な構想については、すでに昭和５１年に芸術家や各界の有識者等からなる第二国立劇場設立準備協議会によってまとめられており、その基本構想によると事業及び施設は次のとおりである。

事業　①　自主制作公演を中心とした公演事業
　　②　優れた芸術性をもった芸術家や劇場技術者の養成
　　③　資料・情報の収集・保存・提供及び

調査研究

施設 ① オペラ・バレエ・現代舞踊等のための大劇場

② 現代演劇・室内オペラ等のための中劇場

③ コンサートホール

④ けい古場

⑤ 製作場、倉庫

⑥ 芸術家養成機関施設

⑦ 舞台芸術情報センター

⑧ 管理関係施設

これらの構想が実現されるならば、世界でも有数の水準と規模をもった舞台芸術のためのセンターとして、世界的な注目を集めることであろう。

建設用地としては、新宿副都心に近い渋谷区初台にある通産省東京工業試験所が近く筑波研究学園都市へ移転する跡地を、文化庁としては予定しており、現在その確保のため関係各方面と折衝中である。

今後の予定としては、５４年度及び５５年度に建築設計競技を行い、基本設計・実施設計・建築工事をここ数年にわたって順次進めていくこととしている。

## 2. 意識調査の趣旨と実施概要

公共施設、特にこの第二国立劇場のように、広く一般市民が来訪し利用する施設の建設計画を進めるに当たっては、利用者として予想される人々の実態と意識を十分に把握しておくことが必要である。

昭和５３年度に、第二国立劇場設立準備の一環として社団法人新情報センターに行っていただいた「現代舞台芸術についての観客層の実態及び意識調査」は、次のような観点から実施されたものである。

① 建設用地を最終的に確定し、建設計画を具体的に進めていくに当たって、現代舞台芸術の振興とそのための第二国立劇場の設置の必要性について、観客層の立場から改めて確認すること。

② 観客層の来場の際の実態を把握することにより、具体的な施設内容の検討に資すること。

③ 第二国立劇場への観客の動員状況を予測し、鑑賞希望等を把握することにより、管理運営及び公演事業の計画の検討に資すること。

このため、調査は大別して次の２つの内容からなっている。

① 現に劇場へ来場して鑑賞している者を対象とした観客調査

② 第二国立劇場の後背地として予想される地域の一般住民を対象とした住民調査

そして両方の調査票の作成に当たっては、できるだけ共通の質問を用意し、結果について比較対照ができるよう配慮した。

主な質問項目は次のとおりである。

① 劇場まではどこから来たか、利用した交通手段は何かなど、当日の開演までの行動の実態（観客調査）

② 当日の公演時間、入場料についての感想（観客調査）

③ 現代舞台芸術への関心（住民調査）

④ 現代舞台芸術の鑑賞の実態と意識（共通）

⑤ 現代舞台芸術の鑑賞の意向（共通）

⑥ 国への期待（共通）

⑦ 第二国立劇場建設についての意向（共通）



観客調査は、昭和５３年の秋に東京都内の５つの劇場（ホール）で行われたオペラ・バレエ・コンサート・現代演劇の８公演について行ったものである。ここでは会場の入口で、小学生以下の児童を除き、ほぼ全員に調査票を渡し、会場の出口で回収するか、或は、郵送により回収するかしたものであり、総配布数8,544票に対し、回収数4,481票（回収率52.4%）であった。

| 調査月日 | 公演団体 | 会場 | 配布数 | 回収数（回収率） |
|---|---|---|---|---|
| 9月14日（木） | 長門美保歌劇団 | 日比谷公会堂 | 1,286 | 629（48.9）% |
| 9月20日（水） | 東京フィルハーモニー交響楽団 | 東京郵便貯金ホール | 504 | 355（70.4） |
| 9月24日（日） | 牧 阿佐美バレエ団 | 東京郵便貯金ホール | 728 | 456（62.6） |
| 9月27日（水） | 劇団四季 | 日生劇場 | 798 | 305（38.2） |
| 10月17日（火） | 読売交響楽団 | 日比谷公会堂 | 1,399 | 911（65.1） |
| 10月21日（土） | 国立ソヴィエト交響楽団 | NHKホール | 2,247 | 1,163（51.8） |
| 11月10日（金） | 文化座 | 都市センターホール | 462 | 170（36.8） |
| 11月18日（土） | 二期会 | 日生劇場 | 1,120 | 492（43.9） |
| 計 | | | 8,544 | 4,481（52.4） |

一方、住民調査は、第二国立劇場建設予定地の後背地区、即ち観客の主要な動員地区となると思われる１１区４市に居住する１８才以上の者を母集団とし、層化２段無作為抽出法によって標本数2,000人を抽出したものであり、回収数は1,609人（回収率80.5%）であった。

| | 昭和53年1月1日現在18才以上の人口 | 標本数 | 地点数 |
|---|---|---|---|
| 千代田区 | 51,670 | 32 | 2 |
| 港〃 | 158,388 | 99 | 7 |
| 新宿〃 | 268,958 | 168 | 11 |
| 文京〃 | 158,495 | 99 | 7 |
| 品川〃 | 269,612 | 168 | 11 |
| 目黒〃 | 209,400 | 130 | 9 |
| 世田谷〃 | 586,637 | 365 | 24 |
| 渋谷〃 | 199,501 | 124 | 8 |
| 中野〃 | 267,591 | 167 | 11 |
| 杉並〃 | 412,490 | 257 | 17 |
| 豊島〃 | 228,199 | 142 | 9 |
| 武蔵野市 | 102,921 | 64 | 4 |
| 三鷹〃 | 121,054 | 75 | 5 |
| 調布〃 | 125,999 | 79 | 5 |
| 狛江〃 | 49,726 | 31 | 2 |
| 計 | 3,210,641 | 2,000 | 132 |

以下この調査の結果のうち、

① 劇場を訪れている観客の実態

② 現代舞台芸術への関心、鑑賞の実態、今後の鑑賞の意向

③ 改善措置についての意向

の３点に焦点をあわせて見てみよう。

## 3. 観客の実態

劇場を訪れている観客の実態については、これまでも公演団体等がアンケート調査を行うなどしている例はあるが、各分野を越えて比較できるような資料は極めて乏しかった。

観客の特性を決定する主要な要素は、公演団体及び公演内容がどのようなものかという点であると思われるので、まず各公演の特徴を挙げると次のとおりである。

① 長門美保歌劇団は、山田耕作作曲「黒船」

であり、久々の再演として話題となったものである。

② 東京フィルハーモニー交響楽団は、若い人々のための演奏会としてベートーベンの交響曲第3番「英雄」等を低料金で実施したものである。

③ 牧阿佐美バレエ団は、ヨーロッパ巡回公演を好評のうちに完了した直後の帰国記念公演であり、チャイコフスキー作曲「白鳥の湖」第3幕その他であった。

④ 劇団四季は、創立25周年記念として行われたジャン・アヌイ作「ひばり」であり、主演は藤野節子であった。

⑤ 読売交響楽団は、定期演奏会であり、指揮にザンデルリンク、ピアノにチコリーニを迎え、ラフマニノフ作曲「パガニーニの主題による狂詩曲」その他であった。

⑥ 国立ソヴィエト交響楽団は、ショスタコーヴィッチ等ロシア作曲家の作曲を演奏したものであり、外国公演団体について参考として取り上げたものである。

⑦ 文化座は、山崎朋子原作による「サンダカン八番娼館」であり、主演は佐々木愛であった。

⑧ 二期会は、モーツアルト作曲「ドン・ジョバンニ」であった。

以上の公演団体はいずれも各分野におけるわが国の代表的な公演団体である。もちろん、他にも調査の対象としたい公演は数多くあったが、日程や組合わせの観点からこれらを取り上げたものである。

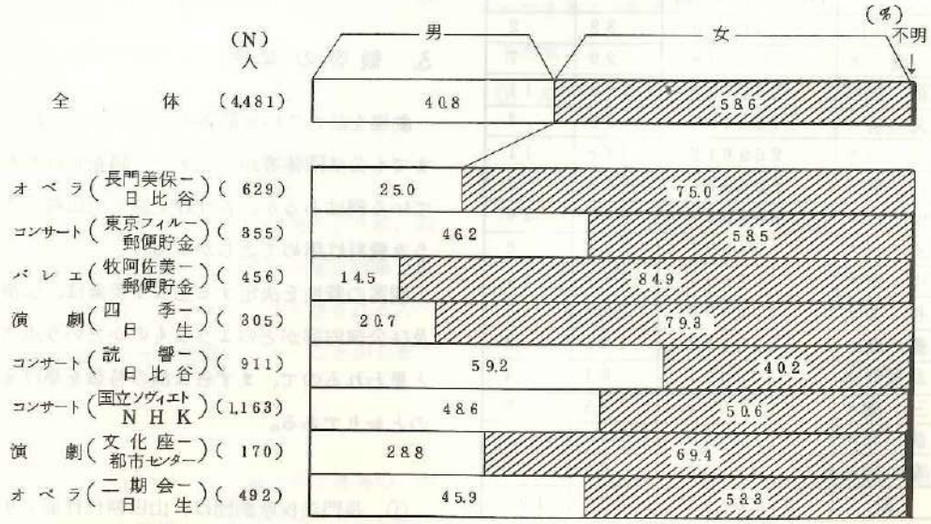
さて、これらの公演の観客の特性は次のとおりである。

(1) 男女の構成比

まず、男女の比率については、（第1図）のとおりであり、公演の内容により大きく異なっていることがわかる。

バレエと演劇では圧倒的に女性が多いのに対して、コンサートでは男女ほぼ半々であり、オペラは、内容により女性が多いものと男女ほぼ半々のものがある。特に定期公演として固定客層を動員している読響の男性比率の高いのが注目される。

図1　男女構成比　―公演別―






(2) 年齢の構成比

観客の年齢は、（表1）のとおりであり、全体としては20才代が約4割を占め、30才代、40才代がそれに続いている。注目されるのは、オペラが比較的高い年代層を動員していることであり、オペラファンには長年の音楽愛好家が多いとも言えよう。また、バレエ公演では、調査対象外とした小学生以下の児童が相当いたことも考えると、10才代以下の占める比率は相当多くなり、男女構成比も併せて考えると、若い女性及び親子連れの観客が多いと言える。

表1　年齢構成比　―公演別―

(%)

| | (N) 人 | 10才代 | 20才代 | 30才代 | 40才代 | 50才代 | 60才以上 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | (4,481) | 14.0 | 39.2 | 18.1 | 17.7 | 6.9 | 3.2 | 0.9 |
| オペラ(長門美保ー日比谷) | (629) | 12.1 | 34.3 | 16.5 | 20.5 | 11.1 | 4.8 | 0.6 |
| コンサート(東京フィルー郵便貯金) | (355) | 14.9 | 51.0 | 15.2 | 12.1 | 4.5 | 2.0 | 0.8 |
| バレエ(牧阿佐美ー郵便貯金) | (456) | 26.8 | 27.9 | 21.1 | 15.1 | 5.7 | 2.2 | 1.3 |
| 演劇(四季ー日生) | (305) | 13.8 | 54.4 | 16.1 | 10.8 | 3.3 | 1.6 | — |
| コンサート(読響ー日比谷) | (911) | 7.0 | 42.4 | 20.7 | 17.6 | 6.4 | 4.9 | 1.0 |
| コンサート(国立ソヴィエトーNHK) | (1,163) | 17.5 | 37.0 | 16.2 | 20.0 | 6.8 | 2.1 | 1.0 |
| 演劇(文化座ー都市センター) | (170) | 2.9 | 41.2 | 27.1 | 13.5 | 6.5 | 6.5 | 2.4 |
| オペラ(二期会ー日生) | (492) | 12.4 | 36.4 | 17.7 | 21.1 | 9.3 | 2.0 | 1.0 |

(3) 職業別の構成比

職業別の構成比は、（表2）のとおりであり、全体としては、専門・管理的職業、学生、事務的職業、家庭婦人の順に多かったが、公演の特性に応じてそれぞれ微妙な変化を見せている。例えば、長門美保のオペラでは長年のファンである家庭婦人が多いこと、東フィルのコンサートでは低料金で学生が多いこと、バレエではその実践者である女子学生と児童を連れた家庭婦人の多いこと等が挙げられる。

表2　職業構成比　―公演別―

(%)

| | (N) 人 | 自営商工業者 | 専門・管理的職業 | 事務的職業 | 労務・サービス業従事者 | 学生 | 家庭婦人 | 無職 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | (4,481) | 2.2 | 31.1 | 18.7 | 4.3 | 26.3 | 12.5 | 2.3 | 2.5 |
| オペラ(長門美保ー日比谷) | (629) | 2.9 | 27.5 | 14.1 | 4.2 | 25.8 | 20.2 | 3.2 | 2.2 |
| コンサート(東京フィルー郵便貯金) | (355) | 1.1 | 22.5 | 24.2 | 7.3 | 31.5 | 9.3 | 2.0 | 2.0 |
| バレエ(牧阿佐美ー郵便貯金) | (456) | 3.1 | 21.7 | 12.7 | 3.8 | 31.1 | 21.5 | 3.5 | 2.6 |
| 演劇(四季ー日生) | (305) | 1.3 | 20.0 | 33.1 | 6.6 | 24.6 | 8.9 | 3.3 | 2.3 |
| コンサート(読響ー日比谷) | (911) | 3.1 | 36.1 | 21.6 | 3.8 | 22.7 | 8.2 | 2.1 | 2.3 |
| コンサート(国立ソヴィエトーNHK) | (1,163) | 1.6 | 34.0 | 16.7 | 4.0 | 29.9 | 10.1 | 1.5 | 2.2 |
| 演劇(文化座ー都市センター) | (170) | 0.6 | 40.0 | 27.1 | 5.8 | 7.1 | 9.4 | 5.9 | 4.1 |
| オペラ(二期会ー日生) | (492) | 2.2 | 38.2 | 14.0 | 2.8 | 24.8 | 13.2 | 1.0 | 3.7 |

(4) 居住地区の構成比

居住地区の構成比は、（表３）のとおりであり、都区内が５～６割、都下が１割前後、周辺３県が２～３割という地域配分である。公演ごとの差異は比較的少ないが、土曜日の公演が比較的広い地域から観客を動員していることがわかる。また、第二国立劇場（仮称）予定地の後背地区居住者は全体でみるとほぼ４割を占めている。

表３　居住地区構成比　―公演別―

（%）

| | | (N) 人 | 東京23区 | 都下 | (後背地区)* | 神奈川県 | 埼玉県 | 千葉県 | その他の県 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | | (4,481) | 53.0 | 11.9 | (38.8) | 12.2 | 7.9 | 6.7 | 3.9 | 4.5 |
| オペラ（長門美保－日比谷） | (木) | ( 629) | 56.6 | 10.7 | (39.1) | 15.1 | 9.1 | 4.6 | 1.4 | 2.5 |
| コンサート（東京フィル－郵便貯金） | (水) | ( 355) | 58.0 | 9.6 | (39.2) | 10.1 | 7.3 | 7.9 | 1.4 | 5.6 |
| バレエ（牧阿佐美－郵便貯金） | (日) | ( 456) | 62.6 | 14.0 | (52.9) | 13.2 | 2.6 | 2.0 | 0.9 | 4.8 |
| 演劇（四季－日生） | (水) | ( 305) | 56.0 | 9.8 | (42.3) | 11.5 | 5.9 | 6.9 | 6.6 | 3.3 |
| コンサート（読響－日比谷） | (火) | ( 911) | 51.6 | 11.9 | (33.6) | 11.3 | 7.8 | 9.2 | 3.2 | 5.0 |
| コンサート（国立ソヴィエト－NHK） | (土) | (1,163) | 45.9 | 12.6 | (33.2) | 11.7 | 10.6 | 7.8 | 6.6 | 4.6 |
| 演劇（文化座－都市センター） | (金) | ( 170) | 67.0 | 9.4 | (42.4) | 6.5 | 5.3 | 3.5 | 0.6 | 7.6 |
| オペラ（二期会－日生） | (土) | ( 492) | 48.2 | 13.0 | (39.2) | 14.6 | 7.5 | 6.9 | 5.9 | 3.9 |

＊後背地区とは千代田、港、新宿、文京、品川、目黒、世田谷、渋谷、中野、杉並、豊島の１１区及び武蔵野、三鷹、調布、狛江の４市のこと。

(5) 帰宅の所要時間

会場から自宅までに要する時間は、居住地域と交通条件によるところであるが、（表４）のとおり、公演の種類、公演時間による差異はあまりなく、３０分から１時間３０分の範囲で７割前後を占めている。

表４　帰宅までの所要時間　―公演別―

（%）

| 〔会場（終了時間　公演団体）〕 | (N) 人 | 30分未満 | 30分～1時間未満 | 1時間～1時間30分未満 | 1時間30分～2時間未満 | 2時間以上 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | (4,481) | 7.7 | 38.0 | 32.5 | 16.4 | 5.0 | 0.4 |
| 日比谷（21:00 長門　美保） | ( 629) | 7.0 | 41.3 | 31.8 | 16.1 | 3.8 | － |
| 郵便貯金（20:30 東京フィル） | ( 355) | 7.0 | 35.5 | 34.1 | 18.6 | 4.5 | 0.3 |
| 郵便貯金（20:30 牧　阿佐美） | ( 456) | 7.5 | 34.0 | 38.8 | 16.0 | 3.5 | 0.2 |
| 日生（21:30 四　季） | ( 305) | 11.8 | 39.7 | 32.1 | 11.1 | 1.6 | 3.6 |
| 日比谷（20:20 読　響） | ( 911) | 8.0 | 38.6 | 35.2 | 14.8 | 3.2 | 0.1 |
| NHK（21:00 国立ソヴィエト） | (1,163) | 7.6 | 36.7 | 28.2 | 18.6 | 8.9 | 0.1 |
| 都市センター（21:20 文化座） | ( 170) | 5.3 | 41.8 | 36.5 | 14.7 | 1.8 | － |
| 日生（21:40 二期会） | ( 492) | 7.5 | 38.8 | 30.7 | 17.3 | 5.3 | 0.4 |



(6) その他

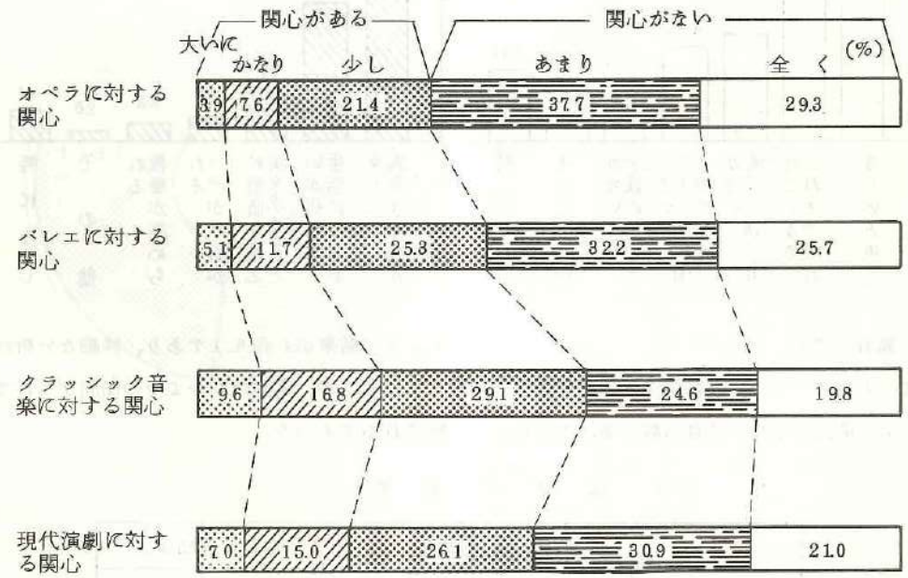
このほか、本調査では、会場に来るまでに利用した交通機関、夕食のとり方、手荷物の状況、自家用車の利用状況等についても実態調査をしており、これらの結果は、駐車場、食堂、クローク等観客の利便のための諸施設の検討に当たっての参考資料とすることとしている。

## 4. 現代舞台芸術への関心、鑑賞の実態と意向

(1) 現代舞台芸術への関心度

都内の１１区４市の一般住民を対象とした調査で、現代舞台芸術に対する関心度を問うてみた。その結果は、（図２）のとおりで、関心が「大いにある」「かなりある」「少しはある」という回答を合わせて「関心がある」とした者は、オペラが８８％、バレエが４２％、クラシック音楽が５６％、現代演劇が４８％となっている。この比率を高いと評価するか低いと評価するかは議論のあるところであろうが、一般住民を対象の調査であることを考慮すれば、現状では直接劇場で鑑賞することには十分結びついてはいないにしても、相当の関心の度合であると言えよう。なお、男女別で比較するといずれも女性の方がやや関心が高く、年齢別に見ると強い関心は演劇を除いていずれも年齢が高まるにつれて強くなるのに対し、関心のある者全体の比率は、クラシック音楽と演劇では若年層が大きいという結果が示されている。

図２　現在舞台芸術への関心度




(2) 関心をもつ（もたない）理由

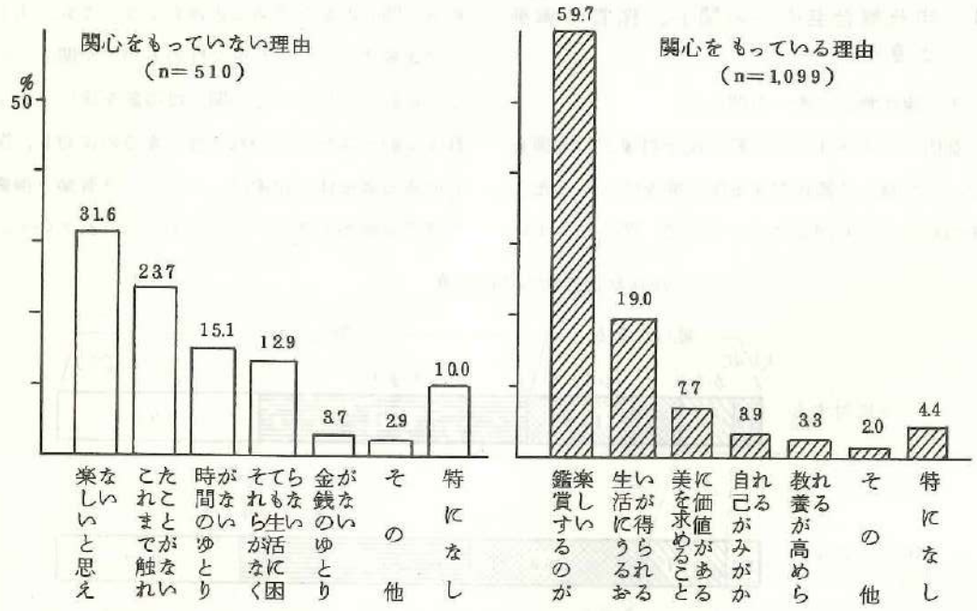
何らかの分野に関心をもつと答えた者の比率は６８％であり、いずれの分野にも関心のない者の比率は３２％であるが、それぞれについてその理由を問うた結果が（図３）である。

関心をもつ理由としては、約８割の者が、楽しみや生活のうるおいといった日常生活次元での理由を挙げており、美の追求、自己をみがくこと、教養を高める等の高次元の理由を挙げた者は約1.5割である。

関心をもたない理由としては、鑑賞しても楽しいと思えない、なくても生活に困らない等の現代舞台芸術そのものに積極的な意味を見出せない者が45%、これまでに触れたことがない、生活に時間的あるいは経済的ゆとりがない等の鑑賞の環境や条件面での理由を挙げたものが43%であった。

この結果から、今後現代舞台芸術の関心層を拡大するためには、生活に更にゆとりが生ずることを待つことはもちろんであるが、内容を楽しく親しみやすいものとすることや、それらを鑑賞することが生活を豊かにするために必要だと感じさせるような内容の追求に努力する必要があろう。

図3　関心をもつ理由




(3)　鑑賞の実態

鑑賞の実態について、観客調査と住民調査のそれぞれで、最近1年間の鑑賞回数を挙げてもらった。その結果が(表5)であり、詳細な分析はここでは省くが、実態のおおよその傾向がこれで理解されるであろう。

表5.　鑑賞の実態

| | | 外国の公演団体 | | 日本の公演団体 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 鑑賞した(%) | その回数 | 鑑賞した(%) | その回数 |
| 観客調査(最近1年間の実態) | オペラ、バレエ | 30.0 | 2.6 | 42.1 | 3.5 |
| | クラシック音楽 | 51.9 | 5.8 | 69.0 | 9.4 |
| | 現代演劇 | 5.8 | 2.0 | 36.7 | 4.1 |



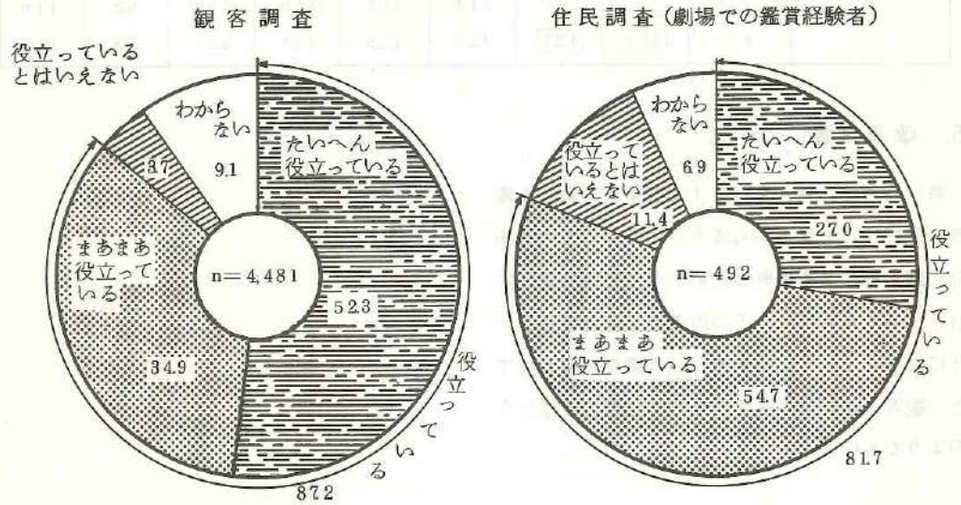
(表5のつづき)

| | | テレビ等を通して | | 劇場(ホール)で(最近1年間) | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 鑑賞した(%) | その回数 | 鑑賞した(%) | その回数 |
| 住民調査 | オペラ、バレエ | (1年間) 47.1 | 3.8 | 15.5 | 2.1 |
| | クラシック音楽 | (1カ月) 55.7 | 6.5 | 18.6 | 3.2 |
| | 現代演劇 | (1カ月) 33.4 | 2.0 | 18.0 | 2.7 |

(4)　鑑賞の効果

現代舞台芸術の鑑賞が生活を充実させるという点で役に立っているかどうかについての答えが(図4)である。肯定的回答を寄せた者がいずれも8割を越えているが、たいへん役立っていると積極的に答えた者の比率は、住民調査では観客調査の約半分である。

図4.　生活の充実にどの程度役立っているか




(5)　今後の鑑賞の意向

今後どの程度現代舞台芸術を鑑賞していきたいか観客と住民にそれぞれ問うたのが(表6)である。

観客調査では、ほぼ全員が鑑賞の意向をもっており、約7割が現状に満足せず、さらに多く鑑賞したいとの意向をもっている。

住民調査では、テレビ等を通しての鑑賞は約6割がその意向をもっており、2人に1人は劇場に直接行って鑑賞したいと答えている。調査対象地域の人口は(18才以上)約800万人であるので、第二国立劇場(仮称)はこの地域だけで約150万人の潜在的需要があると言える。

なお、このほか、今後鑑賞したい分野、入場料と公演水準の希望等について調査しており、これらの結果は、今後公演計画を検討していく上での参考資料として活用することにしている。

表6　今後の鑑賞意向（観客調査）

（%）

| | (N) 人 | 今後も鑑賞したい | | | あまりしたいと思わない |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 今より多く | | 今と同じくらい | |
| | | ずっと | やや | | |
| 全体 | (4,481) | 36.8 | 35.7 | 26.2 | 1.8 |
| 男 | (1,829) | 37.4 ↑ | 30.2 ↓ | 31.3 ↑ | 1.1 |
| 女 | (2,625) | 35.5 | 39.5 | 22.6 | 2.3 |

（注）男女不明を除く

今後の鑑賞意向（住民調査）

（%）

| | (N) 人 | 鑑賞したい | | | | あまり鑑賞したくない | | わからない | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | もっと多く鑑賞したい | | 今と同じくらい鑑賞したい | | | | | |
| | | テレビなどで | 劇場で | テレビなどで | 劇場で | テレビなどで | 劇場で | テレビなどで | 劇場で |
| 全体 | (1,609) | 31.7 | 36.2 | 31.9 | 13.9 | 30.5 | 38.7 | 6.0 | 11.2 |
| 男 | (710) | 25.5 | 27.9 | 31.4 | 15.2 | 36.9 | 45.9 | 6.2 | 11.0 |
| 女 | (899) | 36.6 | 42.7 | 32.3 | 12.9 | 25.4 | 32.9 | 5.8 | 11.5 |

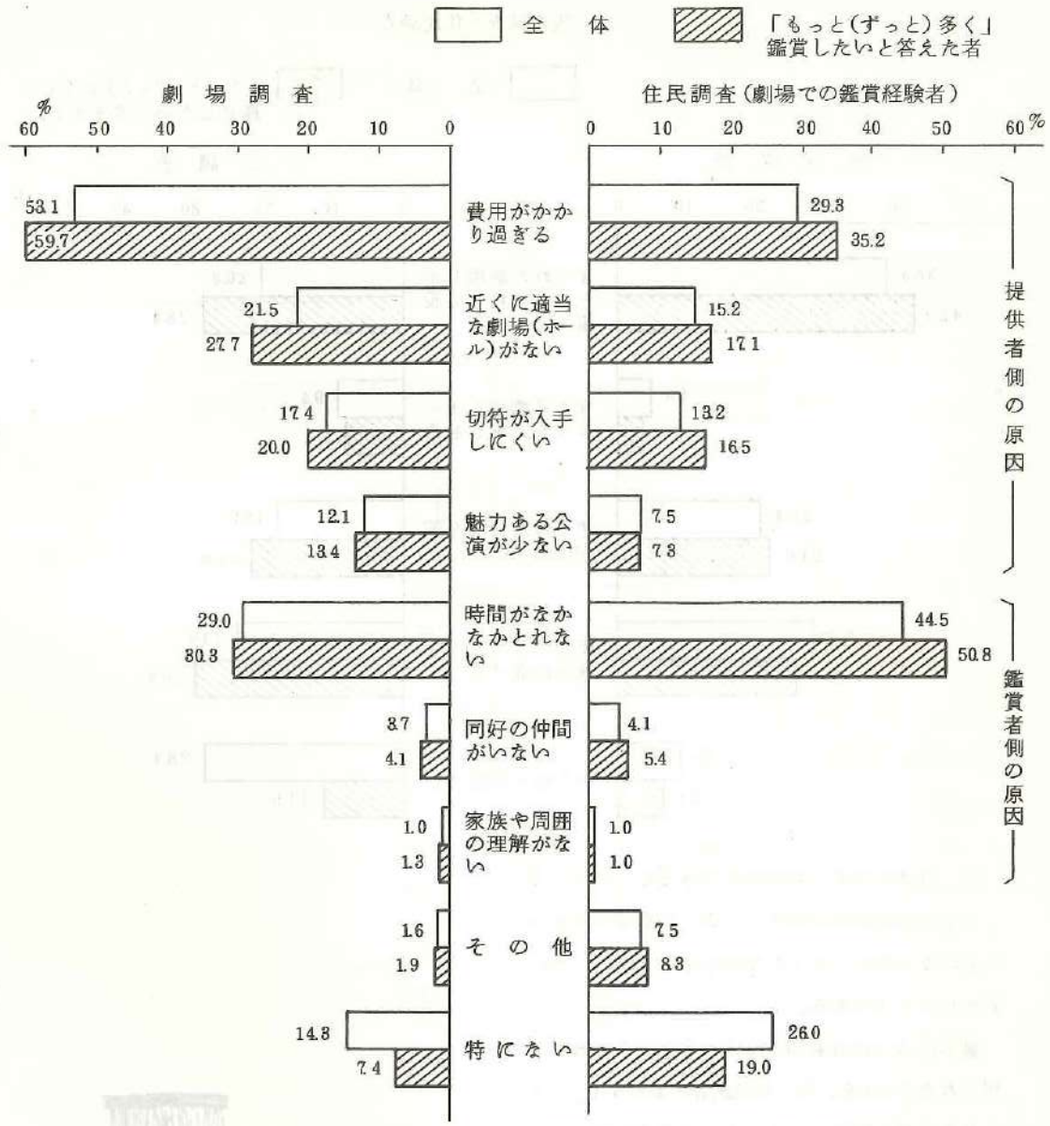
## 5. 改善措置について

舞台芸術は、舞台を創造する芸術家と舞台を鑑賞し愛好する大衆とから成り立っているものであり、国が舞台芸術振興のための条件整備を適切に計っていくためには、その両者の実態と要望を十分には握していく必要がある。本調査に現われてきた観客、住民側の改善のための措置の要望は次のようなものであった。

### (1) 鑑賞の妨げとなっていること

まず、劇場での公演の鑑賞をする妨げとなっていることを挙げてもらったところ（図5）のとおり、観客調査で86%、住民調査で74%の者が具体的に事由を挙げている。事由としては、費用がかかりすぎることと時間がなかなかとれないことが最も多く、それに次いで近くに適当な劇場がないことと切符が入手しにくいことが挙げられている。

図5.　劇場での鑑賞に妨げとなること



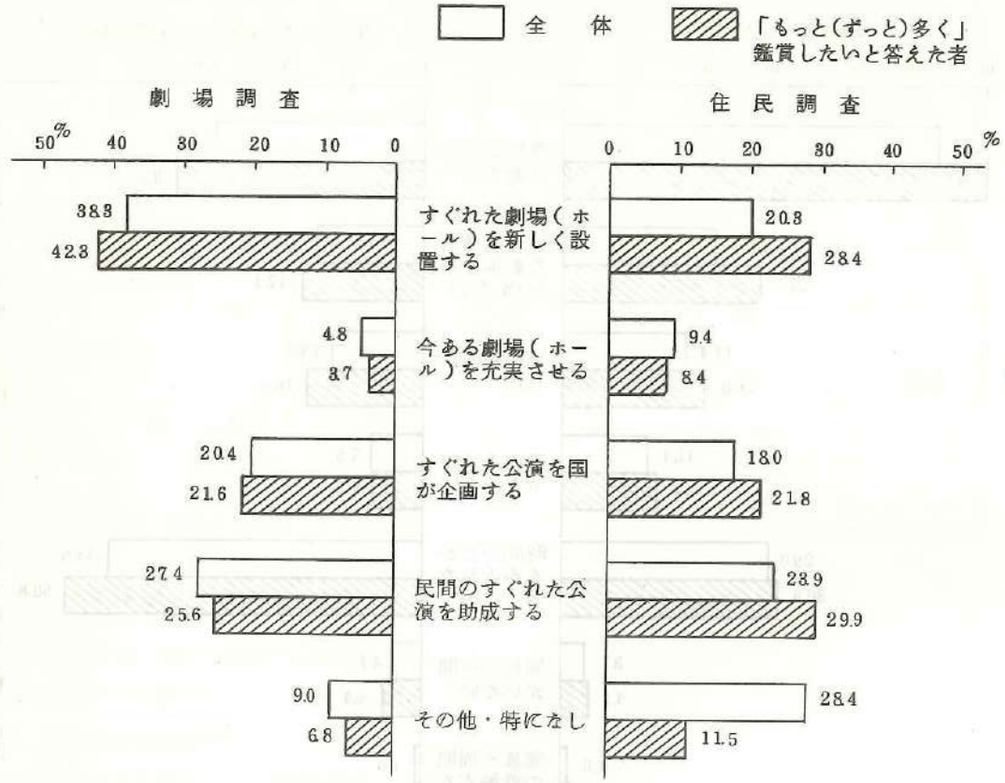

### (2) 国への期待

このような現状に対し、国が舞台芸術の鑑賞の条件整備についてどのような措置を採るべきかを問うたところ、（図6）のとおりの回答であった。

すぐれた劇場を新しく設置するという回答が最も多く、観客調査で38%、住民調査で20%を占めていた。これに次いで、民間のすぐれた公演を助成することと、すぐれた公演を国が企画することが多かった。特に観客調査の分野別の結果を見ると、オペラでは、すぐれた劇場を新しく設置することが最も多く5割近くを占めており、演劇では、民間のすぐれた公演を助成することが最も多く4割を占めるなど、分野ごとの特色がうかがえる。

図6　国に一番期待すること

— 観客調査と住民調査 —

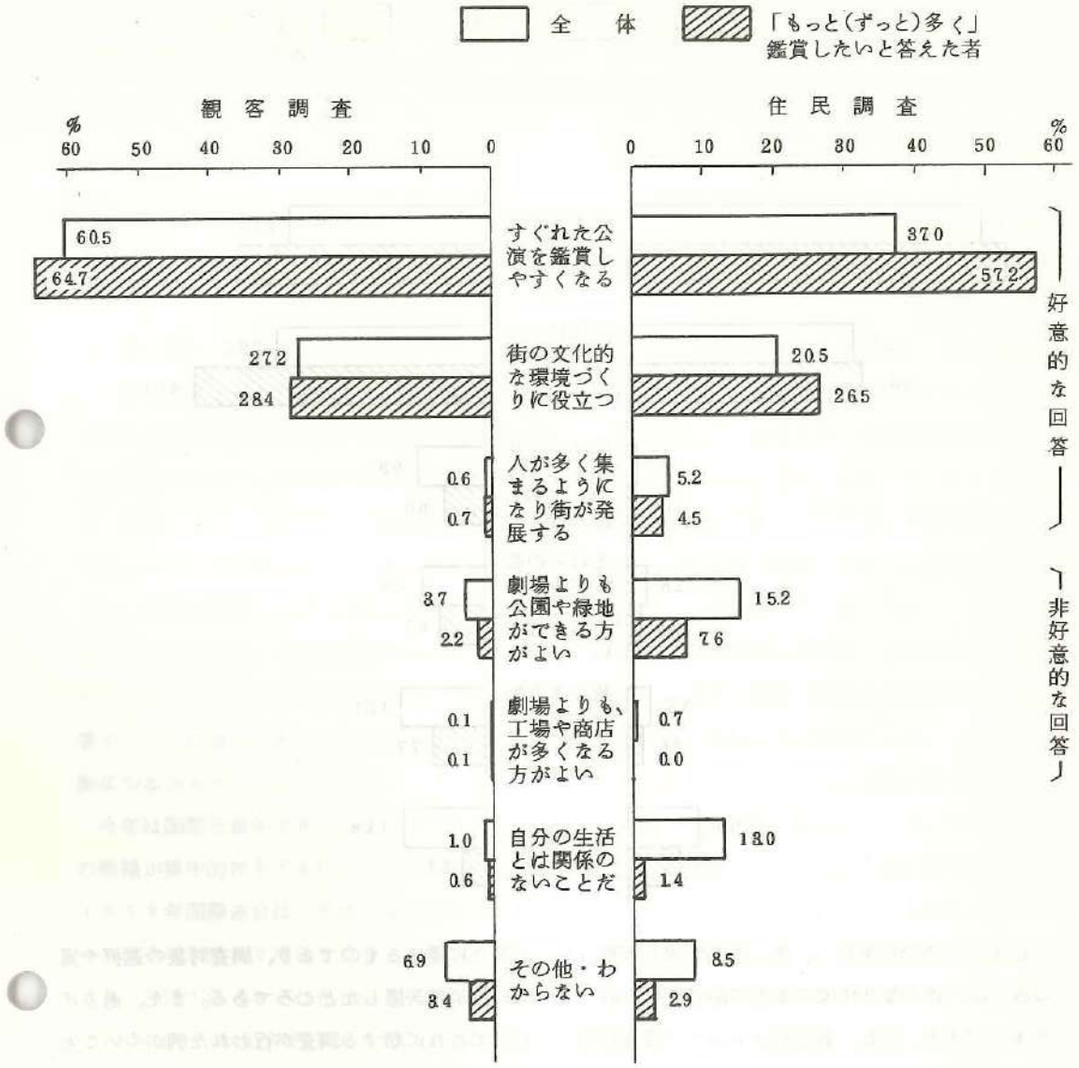



(3)　住まいの近くに劇場ができることについて

それでは回答者の住まいの近くに劇場ができることになったらどのような反応を示すかという結果が(図7)である。

観客調査では好意的な反応が多いことは当然予想されたことであるが、住民調査においても、「すぐれた公演を鑑賞しやすくなる」「街の文化的な環境づくりに役立つ」等の好意的な回答をした者が6割を上回った。

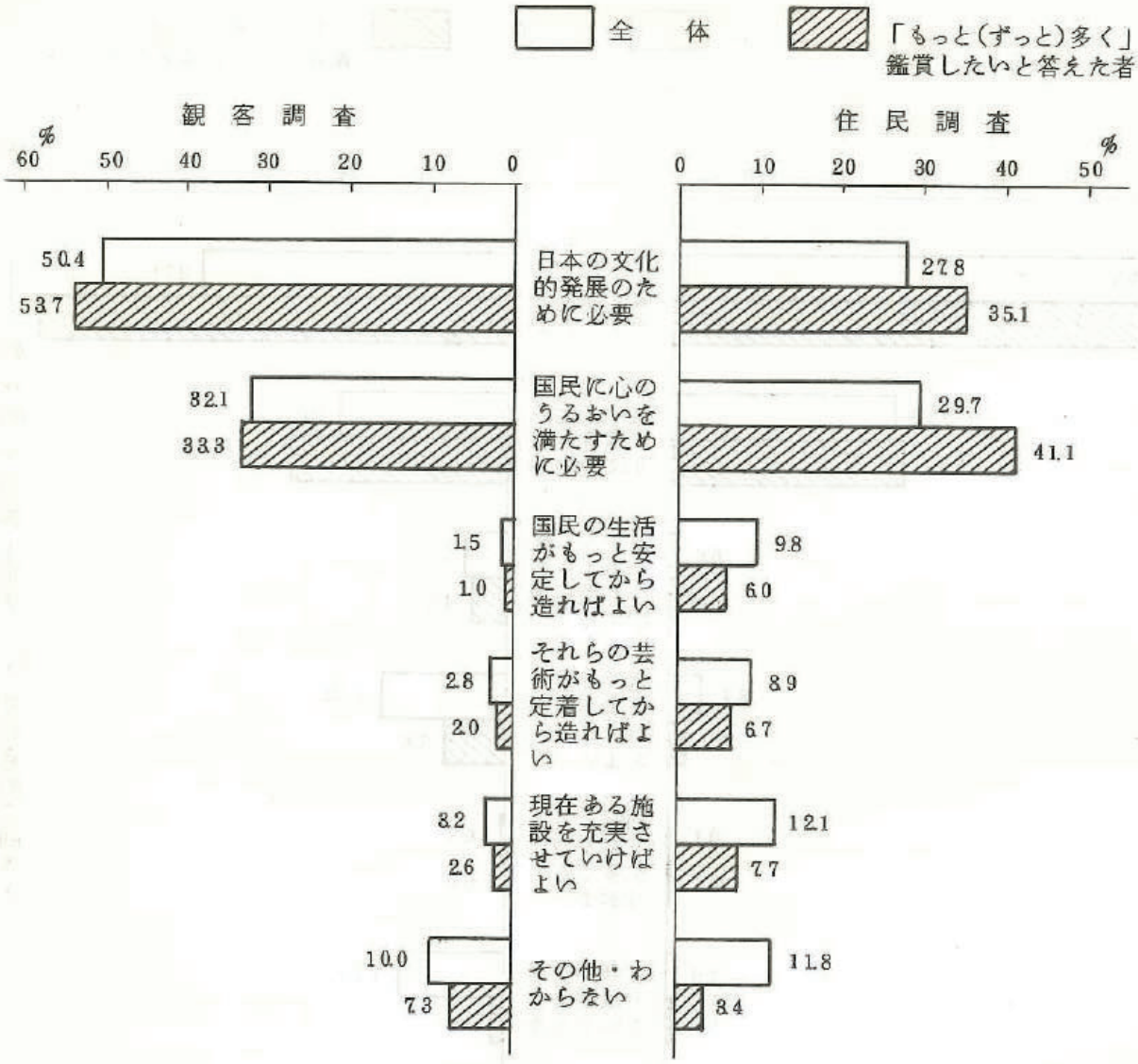
図7　住まいの近くに劇場ができたら




(4)　第二国立劇場(仮称)の建設について

現在準備を進めている第二国立劇場(仮称)についての反応が(図8)である。その必要性を認める者は、観客調査では8割を越えており、住民調査でも6割に近い。

図8　第二国立劇場の建設は必要か




以上の調査の結果から、第二国立劇場（仮称）の設立は、観客及び住民の改善の期待に概ね沿ったものであり、特に、観客層からはその設立に極めて好意的に迎えられているとともに、一般住民の意向としても概ね理解されていると考えられよう。

この調査は、一般の世論調査と異なり、第二国立劇場（仮称）という具体的でしかも特殊な施設の設立に関するものであり、調査対象の選択や質問の設定に苦慮したところである。また、過去においてこれに類する調査が行われた例が少いことから、その面での比較が行えず、分析に当たっても明快な評価を下しにくい点も多々あったと言える。しかしながら、観客及び住民層の実態と意識について、本調査は極めて豊富なデータをもたらしてくれたところであり、これらのデータは今後の計画の進行に際して十分に生かしてまいりたい。